

助産婦との出会い

池部 朋子

三浦さん、「りれ一随筆」へのご紹介どうもありがとうございます。現在仕事を辞め、家事と育児に追われてしまっている自分を反省しつつ、初心に帰るつもりで助産婦として働いていた頃の思い出を書き綴ってみたいと思います。

プロローグ

私が、まず看護職に就こうと思ったきっかけは、中学2年生の冬、父を亡くした事でした。それまで看護婦という職業を将来の夢として考えたこともなかった私でした。しかし父に対して、何ひとつ援助することができなかったはがゆさと、30歳代にして娘3人を女手一つで育てていかなければならなくなった母の苦労を見て、「これから、女性も手に職をつけて働かなくっちゃ!」と、14歳なりに一生懸命考えました。

紆余曲折を経て過ごした看護学生時代。晴れて国家試験には合格したものの、この頃までは助産婦学校への進学希望は全くなく、ある大学病院の外科病棟に就職しました。初めのうちは右も左もわからず、先輩方にたいへん迷惑をかけながらも、毎日とても充実していました。私が勤務していたところは、外科病棟と言えども手術後回復のめどがたらず、終末医療を受けなければならなくなった患者さんも内科に転科せず戻ってきていたため、死に直面する方が数多くいました。もちろん、看護婦になった以上、人の死に正面から向き合わなければならないことは承知していたつもりでした。しかし3年目を迎えた頃、一生懸命疾病と闘ったにもかかわらず、やむなく死を迎えな

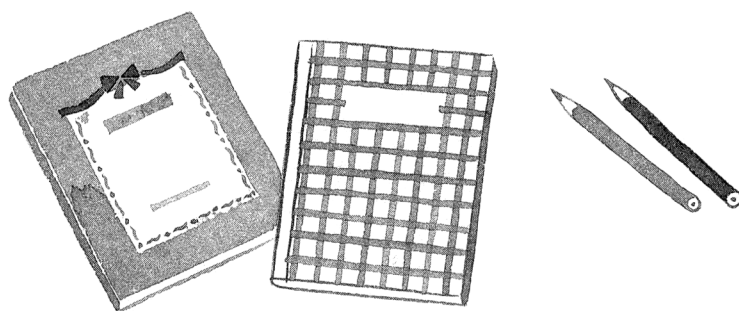
ければならない患者さんに対して、「私は何もできない。医師の指示に従って治療の介助をしているだけではないだろうか」という気持ちでいっぱいになり、日々悶々と悩み始めていました。本来ならばそこで逃げ出すのではなく、もっと努力すべきだったと思いますが、考えた挙句、一度臨床から離れてみることを決意しました。

しかし、やりがいのある看護職以外の職業に就くことは全く考えられなかった私は、何か関連のある進路を選択するつもりでした。長い間思いあぐねた結果、これまで人の死に直面することが多かったけれど、もし助産婦になれば生命の誕生の場面に携われる、正常分娩は医師の指示を仰がずとも介助することができる、という理由で、助産婦学校を受験することを決意しました。今思えば、本当に単純な理由で恥ずかしくなりますが、その後、自分の考えの甘さに大きな挫折を味わうことになるのです。

助産婦学校時代

仕事を続けながら受験勉強をして、ようやく助産婦学校へ入学。一度就職してから学生に戻った私は、勉強も寮生活もとても新鮮でした。しかし、いよいよ実習が始まると、一転して助産婦の責任の重大さに気付かされる出来事に遭遇しました。

私の受け持ち妊婦Mさんは、初産の方でした。妊娠中も特に問題なく順調に経過。予定日も近くなったある日、陣発で入院されてきたため、Mさん同様、私も緊張しながら陣痛室で分娩第一期の援助を行っていました。



Mさんと一緒に呼吸法をしながら腰部をマッサージしていたところ、今まで妊婦さんの声が聞こえていたのに、ほんの一瞬、沈黙が……。その途端、表情が変わりけいれん発作が起きたのです。子癇発作です。私は慌ててナースコールを押し、スタッフの方々に助けを求めました。すぐにかけて下さった数人のスタッフと医師と共に、バイトブロックを口に入れ抱え上げて分娩室へ搬入。内診の結果、ほぼ全開ということで吸引分娩をして女兒娩出。児はすぐに小児科へ転科となりましたが、その後、経過は良好。Mさん自身も分娩直後はかなり血圧が高めで暗室での生活を強いられましたが、徐々に落ち着いてきました。入院生活は長びいたものの、元気に退院されていきました。

妊娠中、1~2回最高血圧が140 mmHg程度になったことはあったのですが、その他妊娠中毒症の症状が全くみられなかったため、予測できずこのような結果を招いてしまいました。このとき、改めて助産婦とはどういう存在なのかと考えました。母親と児の2つの生命を預かること。産科だからといって喜ばしい生命誕生の場面だけではないこと。助産婦自身の判断に委ねられるということは、それに伴う知識と経験が要求されること等々。今となればあたり前のことでも、助産婦を志した頃の私の考えが甘かったことを痛感したのを覚えています。

その後、諸先生方や友人、そして家族に支えられ、無事助産婦学校を卒業しました。そして4年間助産婦として勤務しましたが、現在は子育てに

追われまだ復帰していません。4年間のうち、つらいこともありましたが、助産婦を辞めようと思ったことはありませんでした。私の場合、回り道はしましたが、実際、現場に出てから助産婦の虜になってしまったようです。看護職全搬に言えることでしょうか、とてもやりがいのある大好きな職業に出会えた私は幸せだったと思います。

出産を経験して

昨年の6月に私自身も出産を経験する機会に巡り合いました。午後2時過ぎに陣発してからなかなか進まず、ほとんど一睡もできないまま一晩明かし、微弱陣痛となり、最終的には吸引分娩という結果でした。子供は元気に生まれてくれたのですが、吸引分娩のためか、生後2日目から退院の日まで光線療法を受けることになりました。見慣れているはずのアイマスク姿も、なぜか痛々しく見え、「自然に生めたらこんなことには……」などと、思わず涙ぐんでしまいました。仕事をしている頃は、このようなケースは何回も経験し、「大丈夫よ。心配ないから」と声かけをしてきましたが、「お母さんたちはこんな思いで私たちの説明を聞いていたのか……」と反省させられました。今後、職場復帰する機会があれば、今回の自分の経験を生かした援助をしていきたいと思っています。

次回は、助産婦として勤務した頃の病院で出会った1年後輩の隠田陽子さんにバトンタッチします。とても明るい彼女なので楽しいお話になるのではないかと思います。